## F－12 母と子の意識のズレからみた漁村の親子関係

お茶の水女大家政　湯沢雍彦　高知大教育　○鈴木敏子

目的　伝統的生活構造がかなりよく保持されている志摩半島の一漁村安乗で、出稼ぎによる父親留守家族の増加、漁業後継者の減少といった親子関係にかかわる今日的な家族問題が発生しているので、今回はとくに親子関係に焦点をあてた調査を行った。日常の親子接触の状況、子どもの将来に対する希望や期待、学習に対する関心度について、母と子の意識のズレを測定し、既存の横浜市調査と比較しながら、社会経済的諸条件が変動している漁村の親子関係の特徴を明らかにしようとした。

方法　調査対象：安乗小学校5年生、安乗中学校2、3年生の児童生徒とそれぞれの母親。調査方法：同一質問で構成した児童生徒用、母親用の調査票をもって、子どもには学校で一せいに記入を依頼し、母親には訪問面接調査をした。調査時期：1971年7月5日～8日。分析数：完全回答をペアで得られた母子100組。

結果　Ⅰ．24％の父親が出稼ぎ中、95％の母親が1日平均9時間就労、両親と子が揃って朝食をとる家族が12％（夕食の場合でも40％）、母と子の話合い時間が30分以下62％、等々、親子の接触機会や接触量が少ないと推察できるいくつかの実態がある。Ⅱ．そのためか、母と子の意識の一致率は横浜市より10～30％低くズレが大きいし、本調査の方が否定的回答で一致している傾向にあった。Ⅲ．漁業承継を期待、希望する母子は2～3例にすぎず、漁業に代わる具体的な将来像や展望を見出しているわけでもない。Ⅳ．漁業承継を前提としていた親子関係に動揺がみられ、それがまた母と子の意識のズレを大きくしているともいえる。